

2007年度卒業論文紹介

著者	飯嶋 萌, 兼田 麻世, 保手濱 萌, 木下 美緒
雑誌名	独逸文学
巻	53
ページ	115-122
発行年	2009-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/1038

2007年度卒業論文紹介

1. 飯嶋 萌

ドイツ語の時制について

— 森鷗外作『舞姫』のドイツ語翻訳に見られる実例の分類 —

この論文は以下のように2部構成であり、前半で現代ドイツ語の時制の用法について一般的なドイツ語文法書である DUDEN の時制の項目を参考に述べた後、後半でドイツと縁のある日本人として度々挙げられる森鷗外『舞姫』のドイツ語訳中で、文の成分のひとつである動詞を取り上げ、日本語原文と比較しながら時制の役割を検証している。

第一部 ドイツ語の時制

第二部 森鷗外『舞姫』ドイツ語翻訳の実例分類

1. 主要な時制と副次的な時制

2. 時制機能の決定

3. 個々の時制の用法

- (1) 現在時制
- (2) 未来時制
- (3) 現在時制と未来時制の関係
- (4) 過去時制
- (5) 現在完了時制
- (6) 過去時制と現在完了時制の関係
- (7) 過去完了時制
- (8) 未来完了時制
- (9) 現在完了時制と未来完了時制の関係
- (10) 時制の一致

I. 地の文

1. 現在時制
2. 未来時制
3. 過去時制
4. 現在完了時制
5. 過去完了時制
6. 未来完了時制

II. 会話文・手紙文

1. 現在時制
2. 未来時制
3. 過去時制
4. 現在完了時制

以上による分類から作品中の地の文における現在時制は9.6%、未来時制は0.3%、過去時制は75%、現在完了は2.2%、二重完了と未来完了はそれぞれ1例である。

一方で会話・手紙文における現在時制は68%、未来時制は12%、過去時制は4%、現在完了は15%である。地の文中では過去時制が大きな割

合を占めているのに対し、会話・手紙文中では現在時制の割合が大きい。このことから地の文と手紙・会話文中で時制の用法が大きく異なることが分かる。

以下は地の文、会話・手紙文のそれぞれの中での時制の用例の表である。

	地の文	会話文・手紙文
現在時制(1) 現在の事柄	0	65
現在時制(2) 一般的事柄	9	0
現在時制(3) 未来の事柄	0	4
現在時制(4) 場面的現在	68	0
未来時制(1) 主語が1人称	0	5
未来時制(2) 主語が2人称	0	3
未来時制(3) 主語が3人称	3	4
過去時制	604	5
現在完了(1) 過去の事柄	9	15
現在完了(2) 場面的現在	9	0
過去完了時制	97	0
二重完了	1	0
未来完了時制	1	0
(合計)	801	101

2. 兼田 麻世

名誉殺人にみるトルコ人移民の実情

— ドイツとトルコの価値観の狭間で —

本論はドイツで実際に起きた「名誉殺人」と呼ばれる事件を中心に、ドイツに住むトルコ人やムスリムをめぐる問題、その背景について特に彼らの価値観に焦点を当て論述している。

1960年代ドイツでは戦後の経済復興に伴う労働力不足を補う為に近隣の諸外国から労働者を受け入れ、その多くがドイツに定住し移民の第一世代となったのだが、その中で最大グループだったのがドイツ人と言語

も、文化も、宗教も異なるトルコ人だった。彼らは本国から家族を呼び寄せ定住し、第二世代、第三世代と子孫を育み、現在のドイツでも他の外国人グループ数を圧倒的に引き離している。彼らをめぐる問題の中で、ドイツで生まれ育つ子供が増えるにつれ言語による障害は少なくなった一方、価値観の違いによる問題は9.11テロ以降、人々がイスラームを背景に持つ出来事に敏感に反応するようになった事でむしろ目立つようになった。そのような社会状況の中で彼らトルコ人移民の持つ価値観を象徴する事件として起きたのが、名誉殺人と呼ばれる殺人事件である。

名誉殺人は「家族の名誉を正当なものにする為に文化的義務感から自身の家族集団の中で行われる殺人行為」（ドイツ連邦刑事局のレポートより引用）で、特に中東で多く発生し、トルコでは東アナトリア地方で多く見られる。家族の名誉を汚された者が実行者となり名誉を汚した者を殺害するこの行為は、主に家族・親戚間で、特に家族の女性をその夫や父親、兄弟が殺害する例が非常に多く、ドイツやヨーロッパで生まれ育った移民家族も例外ではない。本論ではトルコ人移民2世の女性が実の弟に射殺された事件を取り上げたが、この事件以外にもドイツでは毎年のように名誉殺人の被害者が出ているのである。

名誉殺人に最も大きな影響を及ぼすのは独特の名誉観である。中東でよく見られる家父長制社会では、女性は子供を生む母として、家事をする主婦として、夫を支える妻としての役割を、男性は家長として女性を含めた家族を守る使命を持っている。しかし女性の純潔や貞操が奪われ名誉が汚された場合、恥とも言える不名誉は何よりもまず家族の監督責任を負う彼ら男性に向けられる。つまり家族の女性の振る舞いによって家族全体の、とりわけ男性の名誉が左右される事になり、男性には家族の名誉を守りまたそれを回復するという義務が生じるのである。

このような名誉観は実は地中海地域に共通するものでありイタリアでも名誉殺人は起こっているのだが、その対象は家族外の男性である。特に中東で、家族内の女性を対象にする名誉殺人が多い理由としてイスラームにおける「個人」があくまで「家族」という枠組みの中で捉えられている事が挙げられる。個人よりも家族集団を社会の構成単位として考えるイスラームの認識によって、ムスリムにおける名誉殺人は「家族」という枠組みの中で、更に「家族」の中でも優位の男性から女性に行われ、

同時に自分達の家族が名誉を守り回復した事を他の「家族」に対して示す役割を持っているのである。

名誉殺人はドイツ人にとって個人のムスリムにおいてもいかに自分達と相容れない価値観を持っているかを強く示した事件であったが、この価値観の摩擦を移民だけの問題とする事は出来ない。イスラームの価値観が、ドイツで生まれ育った世代においても受け継がれていることがこのような事件の重要な原因と考えられるが、彼ら移民がクロイツベルクのような移民街を作り自分達だけの社会や価値観に従って生きる背景には、ドイツ社会に存在し続ける様々な差別から身を守り、トルコ人、ムスリムゆえの障害をドイツという異国で乗り越えようとしてきた過程がある事を忘れてはならない。価値観の大きく異なる両者の溝を埋めるには、ムスリムとドイツ人という個人レベルでその価値観を認め合う事が必要となるだろう。同じ国に住む者として、ムスリムがドイツ、ヨーロッパの価値観を受け入れ、ドイツ人もまた彼らの存在を認める事こそが名誉殺人から被害者を守り、そして今後のイスラームとヨーロッパの様相を左右する鍵を握っているのである。

3. 保手濱 萌

パウル・クレーの絵画と児童美術の関わり

「Kunst gibt nicht das Sichtbare wieder, sondern macht sichtbar. (芸術は目に見えるものを再現するのではなく、目に見えるようにすることである。)」

これは、スイス生まれの画家、パウル・クレーの有名な言葉である。彼は61年間の生涯において、約1万点の作品を制作している。彼の作品は非常に多岐に渡っているのだが、その特徴として、独特の色彩、シンプルな線と形、あるいは記号や文字の使用、また音楽的、詩的、寓話的であるなどが挙げられる。そんな彼の作品に対して、「子どもっぽい」という印象を抱く人も多い。

私はクレーの絵画と児童美術（子どもが描いた絵画）の関わりを研究

テーマとして定めた。単にクレーの絵画と児童美術の視覚的類似性についてではなく、彼の意図や考え方に重点を置いている。彼は児童美術に現れる特徴的な要素を意識的に用いたのかどうか。もしそうならば、そこにはどのような意図があったのか。クレーの絵画と児童美術の関わりについて調べることで、彼が表現しようとしたもの、「目に見えるように」しようとしたものとは一体何だったのか、その答えに迫ろうと試みた。

クレーの絵画と児童美術の関わりを考察するにあたり、その対象となる児童美術とは一体どのような特徴を持つものなのかを知っておく必要があると考え、まずその歴史について調べた。ヨーロッパにおいて、それまで存在さえ認められていなかった子どもに対する無関心が変化しはじめたのは18世紀後半のことである。ルソーがその先駆者となり、教育的、心理学的分野における研究が進んだ。それでも児童美術ははじめ、研究対象としての「子どもの描く絵画」としか捉えられていなかったのだが、次第に「美術」として見なされるようになる。さらに、研究者たちが研究のためにコレクションした児童美術を当時の芸術家たちが展覧会などで目にし、その価値を認め始めた。それはちょうど、クレーが画家として修行を積んでいた19世紀後半から20世紀初頭のことであったという重要なつながりがここで見出せた。

ではなぜ、児童美術は芸術家たちによってその価値を認められ始めたのか。当時の美術史的時代背景を見てみると、その特徴として「主観的表現」が挙げられる。芸術家たちは、それぞれ独自の方法で自身の物の見方、考え方を作品として示そうとしていた。そのような試みの中で、芸術家たちは児童美術に備わっているその「表現力」に価値を見出したのではないだろうか。当時、たくさんの芸術家たちが児童美術を蒐集し、それらの影響を受けていたと考えられ、そこにはクレーと親交の深かったカンディンスキーや、クレー自身の名も挙げられている。

では、クレーは児童美術とどのように関わりを持ったのだろうか。まず、クレーは意識的に児童美術の要素を作品に取り入れたのかどうか。彼の作品の中には、彼自身が幼少時代に描いた絵、あるいは息子フェリックスの幼少時代に描いた絵と非常によく似たものがいくつかある。それらが実際に、彼自身あるいは息子の幼少時代の絵を参考に描かれたものかどうかは分からないが、クレーの日記には「哲学もなく文学もなく、

ただ線、ただ形、しかも子どものスタイル、つまり子どもが描くような絵が自分ではいいと思っています」と彼が児童美術を評価し、またそれらを自身の作品に取り入れようとする記述が見られる。このように、クレーが児童美術を意識的に自分の作品の一部に取り入れたことは、間違いないと言ってよい。

クレーにとって児童美術とは何だったのだろうか。彼の言葉を借りれば、それは「芸術の太初」と呼べるものである。クレーもまた児童美術を蒐集したり、時には彼自身や息子フェリックスの幼少時代の作品を真似て作品を作ることで、「芸術の太初」に近づこうと試みたのかもしれない。けれども、児童美術とクレーの作品はやはり異質のものであった。子どもが一本の線は無意識に描くのととは違い、クレーはひたすら無駄をはぶくという方法で、子どもの描いたような一本の単純な線を描き出した。そして、それを彼は「専門家が達しうる究極の認識」であると述べている。

クレーの作品全てに児童美術の影響が見られる訳ではなく、生涯を通じて様々な技法を試みた彼にとって、児童美術に対する関心もそれらの内の一つにすぎない。彼はそのように様々な取り組みの中で、目に見えない世界、自分の内にある世界をなんとか描き出そうとしたのだろう。

4. 木下美緒

カスパー・ダヴィット・フリードリヒ絵画における 死と永遠

— 「海辺の月の出」を通しての考察 —

カスパー・ダヴィット・フリードリヒはドイツ・ロマン主義の代表的画家で、作品はベルリンの旧ナショナルギャラリーやドレスデンの美術館に数多く展示されている。日本ではあまり聞きなれない名前ではあるが、20世紀に入り、ドイツで高く評価されるようになった画家だ。まず、フリードリヒは徒歩で多くの旅行をし、風景に触れ空気を感じ、その風景を無数のスケッチに描きとめた。実際に見た風景を元に絵画を描いているという点では写実的であると言えるが、彼の絵は心象を描くように構成されている。このことについては、フリードリヒ自身が「画家の課

題とは、空気、水、岩、木の忠実な描写にあるのではない。画家の魂、感情がそこに表現されなくてはならない。芸術作品の課題とは、自然の精神を認識し、魂と心情を尽くしてその中に参入し、これを受け入れ、再現することである」と話している。そして、そうして描かれた絵画が伝えようとするテーマは明確で、常に「死」そして「永遠への憧れ」を漂わせている。これには、彼の生い立ちが密接に結び付く。

論文の中で取り上げた「海辺の月の出」という作品は、フリードリヒの人生観が表れている重要なモチーフがいくつも描かれた作品の一つである。ロマン主義絵画によく見られる「海、船、港」というモチーフはフリードリヒ絵画の中では「この世界、人生の象徴、死」を表す。また人物が着用している「古ドイツ風衣装」はフリードリヒの愛国心を、最大の特徴である「背面人物像」は「家族への愛情」、そして「フリードリヒ自身の生き方」を表している。フリードリヒの絵画の中で、背面人物像は動きを持たない。人物は目前に広がる自然を畏れ、静かに佇んでいる。フリードリヒにとって自然とは永遠なるもの、無限なものであった。彼の絵画の本質はここにある。人間と大きな自然の対比、つまり有限なもの無限なものとの対比こそがフリードリヒが生涯描き続けたテーマなのである。

フリードリヒの絵画は計算され尽くして描かれているが、彼は絵を読み解いて欲しいと観る者に願った訳ではなかつただろう。細かなことは考えずに「海辺の月の出」をじっと観ていると、胸の奥が苦しくなるような切なさを感じるのではないか。絵画の中で、観る者と絵の奥行きを媒介する働きをする「背面人物像」を重視したことから証明されるように、フリードリヒは観る者に彼の世界を感じさせようとした。そしてそれを観た者は、彼の世界で静かな時間を与えられる。彼の絵は決して饒舌ではない。フリードリヒは引きこもりがちな性格であったが、絵を描くことに対しては誰よりも素直であった。絵画は彼にとって無限の可能性を持つ存在であり、宗教的な人間であったフリードリヒにとって「絵を描く」という行為は、最も神に近づくことが出来る手段だったのでないかと考えられる。その中で、彼が自分を隠すことも偽ることもなかつたのは当然である。つまり私達は彼の絵画を観ることで、彼のメッセージを直に感じる事が出来る。そしてそれは、魂と魂の触れ合いなので

ある。「海辺の月の出」の前で私達は、フリードリヒのように自分に素直になるしかないからだ。「海辺の月の出」の背面人物像に自らを投影した時、私達は海の彼方に見える月に神秘を感じ、憧れを抱くだろう。そして温かな光に照らされ優しい気持ちになるが、同時にその光が徐々に失われ夜を迎えることを寂しくも思うのではないか。そう感じる私達人間は、やはりフリードリヒ同様に、永遠なるものに憧れを抱いているのである。フリードリヒの描いた「無限なもの、永遠なものへの憧れ」は、人間の本質であるが、人間は無意識の内に無限なものを恐れ逃げていると私は考える。しかし彼は無限なものと共に真正面から向き合ってきた。そしてフリードリヒがテーマとして描いてきた「限りある命」と「永遠」のコントラストは、自然の偉大さだけでなく、有限なものの尊さをも同時に啓示しているのではないだろうか。